わが心の浜松

昭和48年

当時、周辺は海水浴の中心地

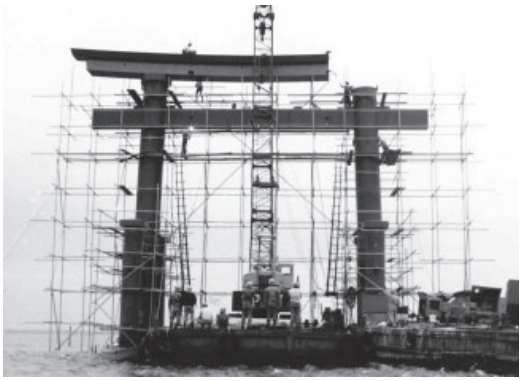
弁天島観光シンボルタワー完成

浜名湖の今切口に臨む弁天島海浜公園。その目の前の天然干潟にそびえるのが、高さ18メートルの鳥居型の弁天島観光シンボルタワーです。柱と柱の間に沈む美しい夕陽は、浜名湖の冬を彩る風物詩として市民に親しまれています。「タワーが完成した昭和48年(1973年)ごろまで、弁天島は海水浴の中心地でした。その後は潮干狩りの名所として、静岡県内はもちろんのこと、山梨、長野、名古屋といった遠方からも多くの観光客が訪れています」。そのように語るのは、舞阪郷土史研究会運営委員の鈴木五十廣(いそひろ)さん＝写真＝です。

このページ下の写真をご覧ください。右側は珍しい建設中の写真(昭和48年5月)。左側は完成直後の写真(同年8月)ですが、よく見るとタワーの下に海水浴客の姿があります。この点で、当時と今とではだいぶ景色が違うといえるでしょう。

「弁天島が観光地として注目されるようになったのは明治40年代以降。国鉄(現JR)東海道沿線でも指折りの景観を誇り、弁天島駅が近いという交通の便の良さもあって、全国各地からの観光客で賑(にぎ)わいました。また、この近辺は近代水泳の中心地としても名をはせ、数多くの名選手を生んでいます」

昭和30年代以降、高度経済成長も相まって弁天島の人気はピークを迎え、最盛期には16軒のホテル・旅館が建ち並びました。しかし、昭和40年代後半からは観光客の足が徐々に遠のきます。それに対する危機感から、観光の新たな起爆剤としてタワーが建設されたという経緯がありました。

「弁天島の美しい自然の中に建つタワーは、今や浜名湖を代表する景観の一つ。ただ、観光客離れに歯止めがかからないのが現状です。今後は近くの舞阪漁港などと連携し、自然と触れ合う体験型、参加型の観光スタイルを提案していく必要があるでしょう」。弁天島の近辺は、アサリ、ノリ、トラフグなど「食」の資源が豊富。それらをもっと活用すれば、近い将来、弁天島が観光の拠点として復活することも夢ではありません。

完成したばかりの弁天島観光シンボルタワー(左)と建設中のタワー